

平成21年5月25日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520152

研究課題名（和文） 寺社勸進・修造をめぐる唱導文芸に関する文献学的研究
—九条家と慶政の動向を中心に—研究課題名（英文） Shodo Pertaining to the Inheritance and Rebuilding of Holy
Temples or Shrines: Focusing on Kujo family and Keisei

研究代表者

近本 謙介（CHIKAMOTO KENSUKE）

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：90278870

研究成果の概要：

院政期末から鎌倉時代初めにかけては、世の動乱とともに宗教世界においても大きな画期を迎えることとなった。そうした中で、九条家の担った役割は大きく、天皇や院の意を推戴しつつ、鎌倉幕府とも連携しながら、新たな信仰世界の秩序を構築していった跡が窺われる。本研究においては、その実態を、寺社の勸進や修造をめぐる唱導文芸の文献学的研究から実証的に考察し、九条家の慶政とその周辺の人々が果たした役割について明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	630,000	4,130,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：九条家・慶政・貞慶・聖徳太子・南都・唱導・勸進・縁起

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する以前に、中世南都における唱導文芸のあり方を探る研究を行い、さらに興福寺の解脱房貞慶に焦点を当てた研究を進めてきたが、その結果、これらの研究が、寺社の勸進や修造の問題と密接に関わり、背後に権門としての九条家のうごきを確認される事例の多いことに気がされた。

そうした問題意識から、寺社の勸進や修

造の際に起草あるいは利用される勸進帳や縁起を具体的に分析し、それらの研究を通じて九条家のうごきを探り、就中慶政の果たした役割を浮き彫りにすることを目標として研究を立案するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、寺社縁起や勸進帳といった文

芸領域に、社寺の継続的経営行為としての勸進・修造という観点を導入することによって、新たな研究の可能性を探ろうとするものである。こうした問題を考える上で重要な時期と事象として、中世前期を考察対象とし、治承四年の南都焼き討ち後の再建事業に、国家事業的側面、藤原氏や鎌倉幕府といった権門や権力の関与などを見据えながら、その全体像を分析することを試みる。

さらに、縁起の再構築や、勸進・修造のための唱導文の作成といった営みを為さしめた基盤を見定めることにより、これらが現場の必然性と分かちがたく結びつきながら展開されたことを明らかにし、それが文化史的にも大きな影響を与えた唱導の領域を下支えするものとして機能した点などに分析の内容を深めていこうとしている。

上記の目的を具体的に分析し考察していく上で、(1) 鎌倉期初頭の九条兼実の関与した南都復興のうごきから、(2) 九条道家と慶政との連繫によって行われた鎌倉中期の勸進といった、大きく二つの重要な時期を設定し、両者のうごきの継続性を探求し、その一方でまた両者の間の質的転換をも跡付けることで、縁起や勸進帳といった唱導文芸の基盤となるべき世界との関わりを立体的に浮かび上がらせ、新たな唱導文芸研究の方向性の一端を提示したいと考えている。

3. 研究の方法

縁起の再構築や、勸進・修造のための唱導文の作成といった営みの基盤を見定める必要性から、研究対象を大きく以下のふたつの時期に区分しながら、研究期間の調査・考察を進めることとした。

(1) 鎌倉期初頭の九条兼実の関与した南都復興の動向。

(2) 九条道家と慶政との連繫によって行われた鎌倉中期の勸進の動向。

(1) については、以下のような調査方法を採用することとした。

南都焼き討ち(治承の回祿)後の再建事業に関する調査と考察を眼目として、東大寺図書館および神奈川県立金沢文庫に伝わる『讚仏乘抄』について、興福寺僧解脱房貞慶との関わりから分析を進め、その周辺資料についても収集を図る。またこのうごきと関わる問題として、文治年間から建久年間へと推移する画期の問題を、東大寺衆徒伊勢参宮と西行の問題に見出し、西行

の関東・奥州への勸進行脚の問題を、東大寺衆徒による伊勢参宮との関わりから問い直す試みを行う。

同時に、九条家との関わりを有する資料の発掘にも努め、春日大社および海住山寺その他での調査を遂行する。これらによって収集した資料については、重要語句などを検索可能とするためのデータベース化を進める。

また、九条兼実と南都興福寺との連携を考える上で重要な場として、内山永久寺に関する研究を進める。ここでは、「内山永久寺置文」・「内山之記」に記載される仏師や絵仏師の活動と、兼実の弟で興福寺別当となった信円との関わりや、そこで生み出される唱導や文芸の問題について、学際的な立場からの分析を行う。

(2) については、以下のような調査方法を採用することとした。

九条兼実との関わりを有しながら勸進・修造が進められた時期との比較・相対化を意識しつつ九条道家と慶政との連携によって勸進が進められた時期に関する調査研究を行う。そのための準備段階として行ってきた九条家の慈円と慶政への展開についての研究を纏めると同時に、その成果を九条家の信仰と文学における継承と展開として位置付けるための研究方法を構築する。

具体的には、慶政の携わった聖徳太子信仰の空間の再構築の問題、自らの活動の拠点となった法華山寺の勸進と縁起との関係、慶政の入宋と東アジアの視点との相関性などを見据える調査を行うこととする。それらを考える上で必要な宮内庁書陵部蔵「九条家本諸寺縁起集」の読解を進め、考察を深める。

4. 研究の成果

研究の方法に示したふたつの時期のうち、(1) に関しては、以下のような点を明らかにした点を成果として掲げることができる。

① 文治から建久年間における東大寺衆徒による伊勢参宮には、後白河院と共に九条兼実の意向が関わっており、そこに西行の伊勢信仰に関わる和歌活動も位置付けるべきである。

② 南都復興の現場とそれを物語る行為を確認することで、東大寺や興福寺といった南都寺院における唱導が「治承がたり」とでも称すべき運動となっており、それが後世に与えた影響は多大である。そうした運

動の中に、「平家物語」が「治承物語」として始発した問題を捉え直してみる必要がある。

③南都復興の唱導を担った重要な人物として解脱房貞慶をあげることができるが、彼の唱導は鎌倉幕府や、幕府を支えた御家人との関係にも及んでおり、これは、従来考慮されることの少なかった南都の唱導と関東との関係を位置付ける上で重要な視点である。

④南都復興の時期に大きな転換点を迎える神祇信仰の問題を、僧侶による参宮という要素から捉え直し、そこに現れる神祇信仰の問題を(2)の時期とも関わる点にも説き及びながら位置付けた。

(2)に関しては、以下のような点を明らかにした点を成果として掲げることができる。

①慶政のうごきと意図とを考える際には、(1)の時期に兼実と連携した慈円との比較や相対化が必要であり、聖徳太子信仰における共通性と展開、それぞれの立場の違いから生じる活動の性格の相違などを明らかにした。従来、慈円から慶政へという展開の問題意識は提示されてこなかったものと思われる。

②慶政における聖徳太子信仰の空間の再構築の問題を取り上げ、それが鎌倉時代の仏教史における太子信仰の再評価と連動することを明らかにした。また、その際に、託宣ということばの領域や、巡礼という行為の領域とが立体的に組み合わされることを明示した。

③慶政が活動の拠点とした法華山寺の縁起について、天理図書館蔵本の立場から検証する作業を行い、慶政自らが縁起の作成や霊験伝承にも深く携わっていたことを確認した。

④慶政の『漂到琉球国記』の内容に検討を加え、それが、中国における経典補修作業と連動する中に記録された性格のものであること、さらに入宋僧としての慶政の東アジアの視点が刻まれたものであることを明らかにした。

⑤本研究の(1)の時期と(2)の時期には連動性を認めることができ、その点を考える一つの事例として、藤原家隆の天王寺における和歌往生の問題を取り上げ、その背景として九条家の動向が密接に関わっていることを明らかにした。

さらに、研究成果をより立体的・多面的なものとするため、研究期間中に研究分担者2名の方をそれぞれコーディネーターとして、研究集会を行った。

ひとつめは、藤岡穰氏の企画による研究

集会「南都復興における縁起と美術」、いまひとつは、川崎剛志氏の企画による研究集会「貞慶の宗教事業の多面性—修験・唱導・真言—」である。

前者の研究集会においては、南都復興における興福寺の造仏活動と縁起との関わりや、藤原氏が氏社として尊崇した春日大社の信仰空間としての展開と絵画との関係、さらには仏像の絵画史との関係から議論を深め、研究遂行上、多くの知見を得ることができた。

後者の研究集会においては、貞慶の活動が、院政期から続く大和国の霊山の体系化と連動するものであったこと、貞慶の唱導の重要な記録である『讚仏乗抄』の新出資料とその位置付け、さらに真言宗との兼学の問題から議論を行い、貞慶の活動を考える上での多面的視点を獲得するのに有益であった。

これらの研究集会は、ともに研究組織以外にも参加・聴講を呼びかけ、それぞれに40名程度の参加者を得て、活発な議論を通じて、ひろく問題意識を共有することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

① 近本謙介、「聖地の継承と再構築に関する言説と行為—聖徳太子信仰をめぐる託宣と巡礼の視点から—」、『アジア遊学』特集「縁起の東西 聖人・奇跡・巡礼」、115、22~31、2008年、査読無

② 近本謙介、「貞慶の唱導と関東—東大寺図書館蔵『如意鈔』をめぐる—」、『戒律文化』、6、45~56、2008年、査読有

③ 近本謙介、「説話集における神祇—僧侶による参宮話とその周辺—」、『国文学 解釈と鑑賞』、72—8、166~175、2007年、査読無

④ 近本謙介、「南都復興と治承がたり」、『軍記と語り物』、43、86~101、2007年、査読有

⑤ 近本謙介、「文治から建久へ—東大寺衆徒伊勢参詣と西行—」、『巡礼記研究』、3、87—100、2006年、査読有

⑥ 近本謙介、「慶政の『漂到琉球国記』」、『国文学 解釈と鑑賞』、71—10

2006年、査読無

〔学会発表〕(計 6件)

- ① 川崎剛志、「熊野三山検校の系譜 山林修行と玉体護持」、名古屋大学比較人文学先端研究・研究集会「室町期における修験道の儀礼再興と文化興隆」、2008年12月20日、名古屋大学
- ② 川崎剛志、「熊野御幸と智証大師参詣」、巡礼記研究会シンポジウム「巡礼と参詣 --その説話・図像・記録--」、2008年9月13日、慶應義塾大学
- ③ 近本謙介、「聖地の継承と再構築に関する言説と行為—聖徳太子信仰をめぐる託宣と巡礼の視点から—」、早稲田大学高等研究所フォーラム「縁起の東西」、2008年3月19日、早稲田大学
- ④ 近本謙介、「巡る人西行の視界—鳥羽院政における宗教施策との関わりをめぐる—」、仏教文学会、2007年9月29日、中尊寺
- ⑤ 近本謙介、「戒律復興をめぐる言説—東大寺図書館蔵『如意鈔』とその周辺—」、戒律文化研究会、2007年6月24日、西大寺
- ⑥ 近本謙介、「中世の内山永久寺をめぐる信仰と文芸」、伝承文学研究会、2006年9月3日、静岡文化芸術大学

〔図書〕(計 2件)

- ① 近本謙介、三弥井書店、『唱導文学研究』6、2008年、321(257~286)
- ② 近本謙介、笠間書院、『中世文学研究は日本文化を解明できるか』、2006年、403(274—293)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近本 謙介 (CHIKAMOTO KENSUKE)
筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授
研究者番号：90278870

(2) 研究分担者

藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70314341
川崎 剛志 (KAWASAKI TSUYOSHI)
就実大学・人文学部・教授
研究者番号：70281524

(3) 連携研究者

2007年度より制度変更にしたがって研究分担者より連携研究者に変更。
藤岡 穰 (FUJIOKA YUTAKA)
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70314341
川崎 剛志 (KAWASAKI TSUYOSHI)
就実大学・人文学部・教授
研究者番号：70281524